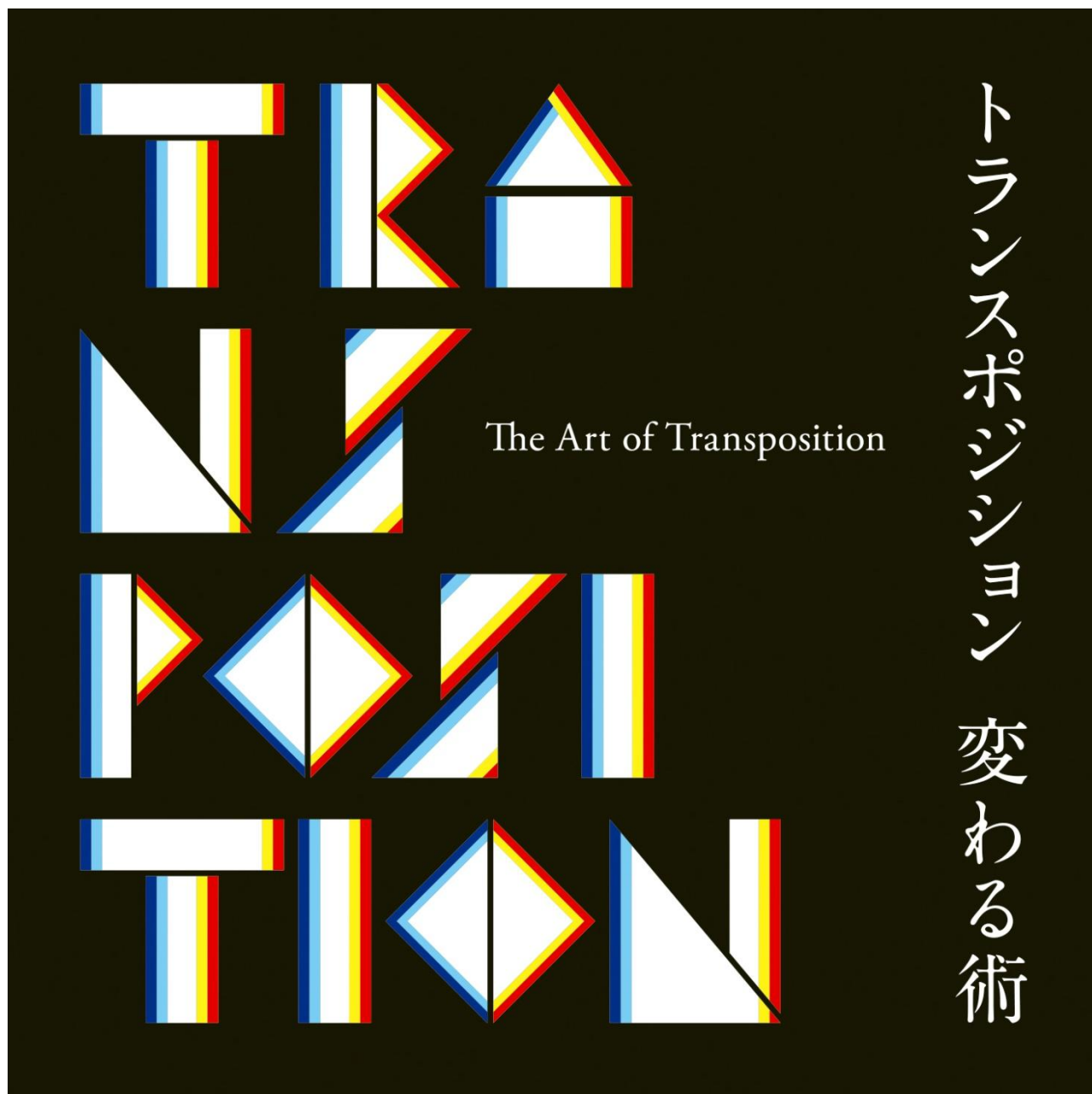


第11回恵比寿映像祭、テーマおよび作家第1弾発表



平成31（2019）年2月8日（金）～2月24日（日）

〔15日間〕 12日（火）、18日（月）休館／10時～20時、最終日18時まで／入場無料（定員制のプログラムは有料）

会場 | 東京都写真美術館／日仏会館／ザ・ガーデンルーム／

恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所 ほか

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

開催によせて |

第11回恵比寿映像祭に向けて

恵比寿映像祭は、2009年の第1回開催以来、おかげさまで第11回を迎えることができました。国内外の映像関係および地域の方々をはじめとする多くの皆様のお力添えに深く御礼申し上げます。

この祭典は、日本初の写真と映像に関する総合的な専門美術館である東京都写真美術館が、多彩で奥深い芸術文化を国内外に発信する文化事業のひとつとして取り組んでいる「アートと映像の祭典」です。

今年のテーマは、「トランスポジション 変わる術」としました。位置を変える、道具を変える、前提となる文化を変える……。様々なトランスポジションで「視点を換え、未来をひらく」ことを考えます。

そして今回も、恵比寿地域の方々に多大なるご協力をいただき、近隣の文化施設やギャラリーなどの会場で連携企画が多数開催されます。多くの皆様のご来場を心よりお待ちしております。

東京都写真美術館は、これからも国際都市・東京の文化発信を担うとともに、恵比寿地域のさらなる活性化に寄与していく所存です。これからも引き続き、皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
館長 伊東 信一郎

開催概要 |

恵比寿映像祭は、年に一度、恵比寿・東京都写真美術館や恵比寿ガーデンプレイス、地域文化施設を会場として行なわれる映像とアートの国際フェスティバルです。

このフェスティバルでは、「映像とは何か」を考えるため、年毎の総合テーマのもとに様々な時代やジャンルの映像を集め構成します。国内外のビデオアート、インスタレーション（空間展示）、劇映画、ドキュメンタリー、アニメーション、実験映像、体験型のメディアアート、ライブ・パフォーマンスなど、多彩な作品がジャンルの壁を越えて一堂に会するのは、世界的にみてもユニークな試みです。

なお恵比寿映像祭は、第11回目を迎え、この先の未来を見据えてポジティブに変わるテーマを掲げました。多様な作品から見出される「映像とは何か」を、関わり・参加する皆さんで考えてみたいと思います。

〔会期〕平成31（2019）年2月8日（金）～2月24日（日）

〔15日間〕12日（火）、18日（月）休館

〔時間〕10:00～20:00（最終日は18:00まで）

〔会場〕東京都写真美術館／日仏会館／ザ・ガーデンルーム／
恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所 ほか

〔料金〕入場無料 ※定員制のプログラムは有料

〔主催〕東京都／東京都写真美術館・アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）／日本経済新聞社

〔共催〕サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館

〔後援〕駐日フィリピン共和国大使館／**TBS**／J-WAVE 81.3FM

〔協賛〕**ANA**／サッポロビール株式会社／東京都写真美術館支援会員

〔協力〕ぴあ株式会社／ドゥービー・カンパニー株式会社／株式会社ロボット

〔公式HP〕www.yebizo.com

恵比寿映像祭のミッション |

恵比寿映像祭は、映像領域と芸術領域を横断するフェスティバルとして、2008年度（2009年2月）より開催され、今年で11年目を迎えます。文化都市東京・恵比寿から発信するフェスティバルとして、東京都写真美術館の全フロア、恵比寿ガーデンプレイスおよび地域に広がる文化施設と共に開催しています。（なお、恵比寿映像祭は、Tokyo Tokyo FESTIVALの一環として開催いたします。）

この恵比寿映像祭は、5つの視点を持って実施しています。カッコのロゴが象徴するのは、カッコの中に入れて、皆で映像について考えてみよう！という姿勢です。

- 1 “一堂に会する” 映像祭
- 2 “芸術の側面から捉えなおす” 映像祭
- 3 “映像って何？ さまざまな作品から体験する” 映像祭
- 4 “担い手と鑑賞者が国と地域を越えて語りあう” 映像祭
- 5 “地域「恵比寿」とともに育ち、発信する” 映像祭



恵比寿映像祭
Yebisu International Festival for
Art & Alternative Visions

第11回恵比寿映像祭 トランスポジション 変わる術（すべ）

Yebisu International Festival for Art &
Alternative Visions 2019
The Art of Transposition

今いる位置から違うところへ移動すること、あるいは、すでにあるものや作法を異なるものに置き換えてみることをトランスポジションといいます。第11回目を数える恵比寿映像祭では、「トランスポジション」をキーワードに、多様な作品やプログラムをご紹介します。

視点の変化や編集の緩急、ひとつの主題を異なるメディアやメソッドで表現すること、あるいは前提となる文化や物理的な環境を変えることなど、多様なトランスポジションの妙によって、アートや映像表現の面白さは形作られます。さらに社会的立場や役割の交換、表現されたものを解釈し直すこともトランスポジションとするならば、多くの示唆に富んだ作品が含まれることになるでしょう。

有為転変は世の習いと云うように、時代や社会は常に動いていきます。トランスポジションは、既存の方法を否定し壊すことだとは限りません。これまでの常識やルールがうまく機能しないとき、意識的に異なる場所に立つことは、ひとつではない答を模索し続ける術であるとともに、変わらないもの、換え難いあり方を見出すための問いでもあります。

第11回恵比寿映像祭では、アートと映像を介して様々なトランスポジションを味わうことを通じて、能動的なアクションと創造性について、作り手、送り手、そして受け手となる観客のみなさまとともに考えてみたいと思います。

恵比寿映像祭ディレクター 岡村恵子

「トランスポジション」のコンセプト |

「トランスポジション」は、以下のような視点で構成しています。

**今いる位置から違うところへ移動すること、
すでにあるものや作法を異なるものに置き換えてみる**

メディアや制作方法のトランスポジション

視点の転換や、編集の緩急、ひとつの主題を異なるメディアやメソッドに置き換えることなど、豊かな映像作品において試みられている、表現上の工夫としてのトランスポジションに注目。

《王国（あるいはその家について）》（150分版）
俳優の身体が、同じシーンを様々に演じ直しながら演出によって変わっていくさまを、ストーリー展開と絡めながら丁寧に描きだしている。



時空や視点のトランスポジション

たとえば子どもたちの目には見慣れた風景が、どう見えているだろう？
いつもと違う旅をすること、過去や未来を思うこと、違う立場から世界を
をみること。想像し、動き、視点を換えてみることの可能性を探る。

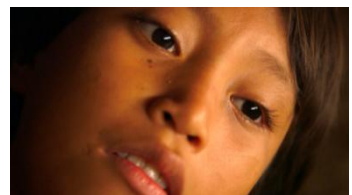
ミハイル・カリキス《とくべつな抗議活動》
大人たちが作り出す世界の矛盾を鋭くみつめ、異論をとнаえる子どもたち。



異文化間のトランスポジション

前提となる文化や物理的な環境を換えるだけで、物の見え方、感じ方は
大きく変わる。異文化間の交錯による創造性のかたちを見つめる。

ルイーズ・ボツカイ《エフアナへの映画》
アマゾンの奥地で伝統的な生活を守り暮らしている先住民女性たちとの交流を追うなかで、
当たり前前に思っていた現代の価値観が見つめ返される。



身体観や世界観のトランスポジション

すでにはじまっている未来。技術の発達や社会の変化が、個人や社会の
あり方にもたらす変化について考える。

岡田裕子《エンゲージド・ボディ》【新作】
細胞の置き換えによる再生医療をテーマに、先端技術が描く未来と人間の関係性の変質に
ついて問いかける。



**前提や環境を変えることで、現状に留まらず、
おのずと「変わる」。新たな創造性を生み出す「変わる術」
としてのトランスポジション**

出品予定作家 |

ルイーズ・ボツカイ |
Louise BOTKAY

展示



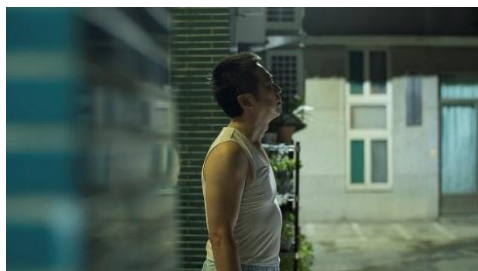
1978年リオデジャネイロ（ブラジル）生まれ、リオデジャネイロとパリで活動。美術家、映画作家。2006年フランス国立映像音響技芸高等学院（La Fémis）を卒業。携帯電話、ビデオ、スーパー8、16ミリ・35ミリフィルムを用いて写真や映画を制作、フィルムは自ら現像する。国際的な受選歴、受賞歴が多数ある。

ルイーズ・ボツカイ《エフアナへの映画》2018年
Louise BOTKAY, *A film for Ehuana (Um filme para Ehuana)*, 2018

温かく対象を愛しむボツカイの視線がとらえたヤノマミ族の母子たちの美しさは、忙しい都市生活の有り様を対照的に照らし出す。

カロリナ・ブレグワ |
Karolina BREGUŁA

展示



1979年生まれ、ワルシャワ（ポーランド）在住。美術家、映像作家。国立ウッチ映画大学（ポーランド）卒業。ザヘンタ国立美術館（ワルシャワ）、インスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アーツ（ロンドン）、ユダヤ博物館（ニューヨーク）、第55回ヴェネツィア・ビエンナーレなどで作品を発表。Views 2014 ドイツ銀行賞2位、第41回グディニャ映画祭ゴールデン・クロウ賞を含む受賞歴多数。シュチェチン美術アカデミー准教授。

カロリナ・ブレグワ《広場》2018年
Karolina BREGUŁA, *Square (Skwer)*, 2018

ポーランド出身のブレグワは、長年温めていた物語を、台湾で現地の人々の協力のもと映像化。8面のスクリーンの間を観客が物理的に移動しながら鑑賞するインスタレーションとして発表する。

地主麻衣子 |
JINUSHI Maiko

展示



1984年神奈川県生まれ。多摩美術大学絵画専攻修了。個人的な物語をテーマとしたドローイングや小説の制作から発展し、映像、インスタレーション、パフォーマンスなどを総合的に組み合わせた「新しい種類の文学」を創作する。主な展示に「欲望の音」（HAGIWARA PROJECTS、東京、2018）、「黄金町バザール2017」（黄金町エリア、神奈川、2017）など。

地主麻衣子《新しい愛の体験》2016年 [参考図版]
JINUSHI Maiko, *A New Experience of Love*, 2016 [related image]
©Maiko Jinushi Courtesy of HAGIWARA PROJECTS

地主麻衣子は、恵比寿映像祭のための新作を発表予定。何気ない動きかけを入り口に、自己と他者、個人と社会との間に生まれる磁場のような影響関係についての考察を映像化する。

出品予定作家 |

ミハイル・カリキス | Mikhail KARIKIS

展示



ギリシア／イギリス出身、ロンドン在住。彫刻の素材としての、また社会を仲介するものとしての音への、長期にわたる調査を経て制作される彼の作品は、映像、サウンド、パフォーマンスといった多岐のメディアにわたる。コミュニティと協働して制作されるカリキスのプロジェクトは、人の営みや行為のオルタナティブなモデルに焦点を合わせる。第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2011）、マニフェスタ9（ベルギー、2012）、あいちトリエンナーレ（2013）、シドニー・ビエンナーレ（2014）などで国際的に作品を発表している。

ミハイル・カリキス《とくべつな抗議活動》（プロダクション・フォト）2018年
Mikhail KARIKIS, *No Ordinary Protest* (film production photograph), 2018

国際的に活躍するアーティスト、ミハイル・カリキスの作品が待望の登場。観る者の感覚に訴える、迫力ある映像と音によって、批評的な視点を提示する。

牧野貴 | MAKINO Takashi

展示

上映



1978年東京都生まれ、横浜市在住。映像作家。想像力・記憶など人間の身体内部にある映像と融合する映画を探究し、極めて重層化・深層化された独特な抽象映像作品を手がける。映画はこれまで世界100都市以上で上映され、国際映画祭での受賞多数。近年は映画、パフォーマンス、インスタレーションなど、よりジャンル横断的に作品を制作、発表している。

牧野貴《Cinéma Concret》2016-2017年 [参考図版]
MAKINO Takashi, *Cinéma Concret*, 2016-2017 [related image] Courtesy of Empty Gallery, Hong Kong

独自の映像言語で、世界各地にファンを持つ日本を代表する抽象映像作家。大規模映像インスタレーション、4K新作映画上映とともに、初期コラージュ作品も。

岡田裕子 | OKADA Hiroko

展示



現代美術家。ビデオアート、写真、絵画、インスタレーション、パフォーマンスなど多岐にわたる表現を用いて、自らの実体験——恋愛、結婚、出産、子育てなど——を通したリアリティのある視点で、現代の社会へのメッセージ性の高い美術作品を制作。国内外の美術館、ギャラリー、オルタナティブスペース等にて展覧会多数。現多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科非常勤講師。

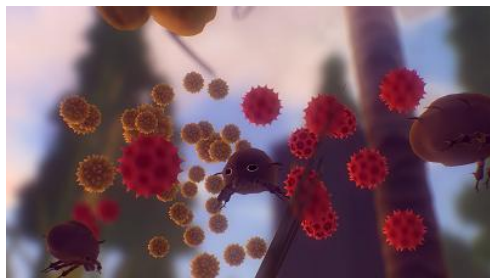
岡田裕子《エンゲージド・ボディ》（新作）2019年 [初期イメージドローイング]
OKADA Hiroko, *Engaged Body* (New work), 2019 [first drawing image]

独特のユーモアを交えながら鋭く現代社会を見据える岡田裕子の最新プロジェクトを発表。再生医療の発達が人間観や人と人との関係性にもたらす変化について考察する。

出品予定作家 |

デヴィッド・オライリー | David OREILLY

展示



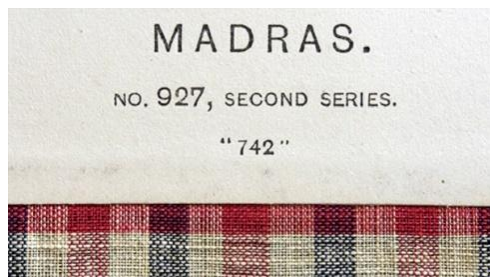
1985年アイルランド生まれ。デザイン、アニメーション、ビデオ・ゲームを手がける。《おねがい なにかいって》(2009)などの映像作品で多くの賞に輝き、国際的な回顧上映も多数行なわれている。スパイク・ジョーンズ監督《her/世界でひとつの彼女》(2013)の劇中に登場するビデオ・ゲームを担当したほか、テレビ番組「アドベンチャー・タイム」や「サウスパーク」の作者としても活躍。革新的なゲーム作品《エヴリシング》(2017)でアルスエレクトロニカの大賞を受賞。

デヴィッド・オライリー 《エヴリシング》2017年
David OREILLY, *Everything*, 2017
©David O'Reilly

3 DCGによる表現の可能性を独自に掘り下げてきたオライリー。《エヴリシング》は、微生物の視点から銀河の彼方まで、ヴァーチャルな世界の森羅万象を自由にたどる「環世界的」ゲーム。

サシャ・ライヒシュタイン | Sascha REICHSTEIN

展示



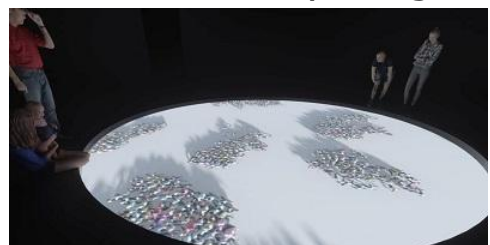
1971年チューリッヒ生まれ、ウィーン在住。彼女の仕事は、文化の転置に関する問い、および伝統と近代化の関係の問題を扱っている。ライヒシュタインの写真やビデオ、フィルム、インスタレーション作品は、西洋の地域的な状況に焦点を当て、その世界的な拡張、接点、そして変転を検証する。映像作品は、ウィーン国際映画祭(2018)、オーバーハウゼン国際短編映画祭(ドイツ、2018)、「テキストスタイルと場所」会議(マンチェスター、イギリス、2018)ほかで、国際的に発表されている。

サシャ・ライヒシュタイン 《征服者の図案》2017年
Sascha REICHSTEIN, *Patterns of the Conquerors*, 2017

高精細な映像が伝えるインドの名もない人々の手わざの妙。美術家ライヒシュタインによる、アーカイブ資料をポスト植民地主義的な視点から読み解く試み。

ユニヴァーサル・エヴリシング | Universal Everything

展示



2004年、シェフィールド(イギリス)で、マット・パイクにより設立。未来のスクリーンのための新しい動画の形を創案するデジタル・アートとデザインのコレクティヴ。研究に専心し、それをアート作品や制作委嘱、展覧会へとつなげる。映像や音、光、建築、そしてインタラク션을を介し、しばしば複数の感覚に訴える体験を生み出す。彼らのアプローチは、感情や知覚を誘発し、相互作用を促すために、人間と技術とを組み合わせるものである。先進的な人々、大手企業やブランド、文化機関とのコラボレーション多数。

ユニヴァーサル・エヴリシング 《トライブス》(展示スケッチ) 2018年
Universal Everything, *Tribes* (sketch), 2018

世界各地で大規模なプロジェクトを手がけている人気クリエイティヴ・ユニット。集団の行動パターンをシミュレーションした映像による最新インスタレーションを発表。

出品予定作家 |

草野なつか | KUSANO Natsuka

上映



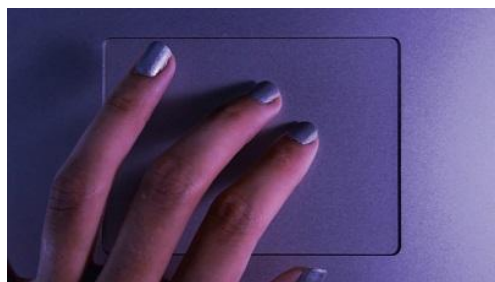
1985年生まれ、神奈川県出身。東海大学文学部文芸創作学科卒業、映画美学校12期フィクション・コース修了。2014年《螺旋銀河》で長編映画を初監督。第11回SKIPシティ国際Dシネマ映画祭（埼玉県）にてSKIPシティアワードと監督賞を受賞。《王国（あるいはその家について）》は長編監督2作目であり、愛知芸術文化センターによる招聘で制作された作品である。

草野なつか《王国（あるいはその家について）》（150分版）2017-2018
KUSANO Natsuka, *Domains* (Long version), 2017-2018
©Natsuki Kuroda

長編デビュー作品《螺旋銀河》で高い評価と注目を集めた草野なつかの最新作。俳優が役をとりこんでいく過程の身体の変化を追いながら、ストーリーが展開する。

ジェシー・マクリーン | Jesse MCLEAN

上映



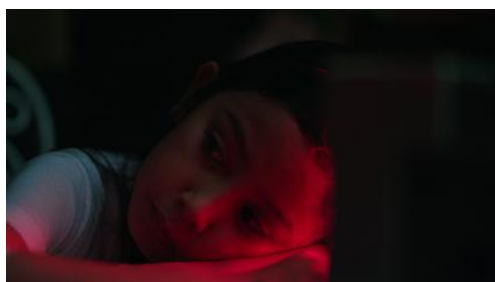
メディア・アーティスト、教育者。メディアを用いて観察、あるいは表現された、人の振る舞いや関係性に深い関心を持ち、研究を行っている。人間を個人ではなく集団と前提するメディア、その体験に特有の力学と機能不全が存在する。それらへの興味に基づくマクリーンの作品を観る者は、覗き見することと参加することの間を往き来することになる。ロッテルダム国際映画祭、ヴェネツィア国際映画祭、トランスメディアール（ベルリン）、25FPS映画祭（ザグレブ）を含む、世界中の美術館、ギャラリー、映画祭で作品を発表している。

ジェシー・マクリーン《あなたが行くところどこにでも》2017年
Jesse MCLEAN, *Wherever You Go, There We Are*, 2017
©Jesse Mclean Courtesy of Video Data Bank, www.vdb.org,
School of the Art Institute of Chicago

創意に富んだ映像で知られる気鋭のメディア・アーティスト、ジェシー・マクリーンによる、ありふれた古い絵葉書とスパムメールの文章を印象的な電子音楽とともにコラージュした注目の実験映像。

シリーン・セノ | Shireen SENO

上映



日本にてフィリピン人家庭に生まれ幼少期を過ごす。初長編《ビッグ・ボーイ》（2012）がリマ・インディペンデント映画祭（ペルー）にて最優秀賞を受賞。《ナーヴァス・トランスレーション》（2018）はロッテルダム国際映画祭のタイガー・アワード・コンペティション部門でプレミア上映され、アジア映画の最優秀賞であるNETPAC Awardを受賞した。

シリーン・セノ《ナーヴァス・トランスレーション》2018年
Shireen SENO, *Nervous Translation*, 2018
©Los Otros Films

世界各地の映画祭で高く評価されているフィリピン期待の女性監督シリーン・セノの最新長編映画。1987年マニラの政情不安を背景に、多感な8歳の少女の目線で多彩に描き出す。

トークやライブなど多様なプログラム |

トーク・セッションやパフォーマンス、ライブ・イベントなどを開催。展示や上映のみではない様々な形式で、映像文化の楽しみ方や理解を深める場をお届けいたします。

■ラウンジトーク■ 開放的で気持ちのよい美術館2階ロビーの吹抜け空間では、映像の作り手・受け手・担い手が、カジュアルな雰囲気の中、作家や作品の背景に触れる「ラウンジトーク」を開催いたします。映像というメディアについてさらに理解を深め、発見を促す機会を提供します。

■シンポジウム／レクチャー■「展示」「上映」プログラムと連動し、映像表現における現在の課題や社会的な動きについて「シンポジウム」を設定し、豊かな議論を喚起していきます。さらに「レクチャー」では、議論の担い手やアーティストが具体的な各論について実践的なトーク・セッションを行ないます。

■ライブ・イベント■ そのほか、ザ・ガーデンルームでは、実験的なパフォーマンスを展開する「ライブ・イベント」を実施いたします。プログラムの詳細は決定次第、恵比寿映像祭公式ウェブサイト（www.yebizo.com）で発表いたします。

ラウンジトーク	東京都写真美術館 2F ロビー（無料）
シンポジウム／レクチャー	東京都写真美術館 1F ホール（定員190名／有料チケット制）
ライブ・イベント	ザ・ガーデンルーム（定員150名／有料チケット制）



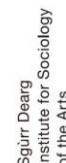
〔展示出品作家〕ラファエル・ローゼンダール／ラウンジトークの様子 第10回恵比寿映像祭より（会場：東京都写真美術館）
撮影：新井孝明



ライブ・イベント「mamoru ライブ・パフォーマンス：あり得た（る）かもしれないその歴史を聴き取ろうとし続けるある種の長い旅路、特に日本人やオランダ人その他もろもろに関して」の様子 第10回恵比寿映像祭（会場：ザ・ガーデンルーム）より 撮影：新井孝明

東京・恵比寿から映像文化を発信！「YEBIZO MEETS」始動 |

恵比寿地域に点在する文化施設やギャラリーと連携し、恵比寿映像祭のテーマに合わせたそれぞれ独自の視点によるプログラムや発信型のプログラムを「YEBIZO MEETS」という呼称で恵比寿の街から展開。これまで培った地域ネットワークの発信力をさらに高めて開催いたします。



会場構成 |

① 東京都写真美術館

東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

展示 上映 レクチャー
ラウンジトーク シンポジウム

② 日仏会館

東京都渋谷区恵比寿3-9-25

展示 シンポジウム

③ ザ・ガーデンルーム

東京都目黒区三田1-13-2 恵比寿ガーデンプレイス内

ライブ・イベント

④ 恵比寿ガーデンプレイス センター広場

東京都渋谷区恵比寿4-20 恵比寿ガーデンプレイス内

オフサイト展示

⑤ 恵比寿地域文化施設およびギャラリーなど

地域連携プログラム参加施設・団体：

公益財団法人日仏会館 | TMF日仏メディア交流協会 / YEBISU GARDEN CINEMA / 伊東建築塾 / MA2 Gallery / CAGE GALLERY / Gallery 工房 親 / MuCuL / NADiff a/p/a/r/t / MEM / Galerie LIBRAIRIE 6 / AL | TRAUMARIS / NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] / スクールデレック芸術社会学研究所

YEBIZO MEETS | 地域連携プログラム / 地域発信プロジェクト



【恵比寿映像祭に関するお問合せ】

※ 報道・媒体関係者様のお問合せに限らせていただきます。

恵比寿映像祭担当（東京都写真美術館）：柳生（やぎゅう）、印牧（いんまき）

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話：03-3280-0076 / ファクス：03-3280-0033 / E-mail：yebizo_press@topmuseum.jp

【プレスリリース/広報用画像/ご取材に関するお問合せ】

恵比寿映像祭プレス担当（TMPRESS）：平（たいら）

電話：090-1149-1111（平）

ファクス：03-3468-8367 / E-mail: info@tmpress.jp

※ 本リリース内で使用している写真を広報用画像としてご用意しております。
ご希望のプレスの方は、①ご希望画像の作品名 ②貴媒体名 ③掲載予定時期
を表記のうえ、上記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

※ 12月に作家作品の詳細決定後、2次リリースを発表予定です。
詳細は、恵比寿映像祭公式サイト（www.yebizo.com）でお知らせいたします。

※出品作品および出品作家など事業の内容については、変更する場合があります。予めご了承ください。